

# 「ジャポニスム 2018：響きあう魂」 訪問の概要報告

日本弁護士連合会事務局  
村上 真以

日弁連知的財産センター<sup>1</sup>と弁護士知財ネット<sup>2</sup>では、各組織内に「ジャパンコンテンツチーム」<sup>3</sup>を設置し、調査・研究を行ってきた。この度、今世紀最大規模の日本文化発信事業である「ジャポニスム2018：響きあう魂」（以下「ジャポニスム2018」という。）が開催されているフランス共和国・パリを訪ねる機会に恵まれたことから、本イベントの（ほんの一部ではあるが）訪問の概要を報告する<sup>4</sup>。

## 1 「ジャポニスム 2018」の概要

ジャポニスム2018は、文化の都パリを中心にフランス全土で今年7月から翌2019年2月までの約8か月間にわたって開催される。

日本国内でも、最近では7月の出陣祝賀会の様子（特に、安倍総理大臣と香取慎吾さんが揃いのロゴ入り法被を着て並ぶ姿）が盛んに報じられ、また9月中旬には皇太子のフランス訪問について、日仏両国間の絹織物を通じた交流・交易の歴史にスポットライトが当たるなどしたので、ご存知の方も多数いらっしゃると思うが、まずは本イベントの概要を紹介する。

### (1) 開催の経緯

2016年5月の日仏首脳会談にて、安倍総理大臣とオランダ大統領（当時）との間で開催が合意されたことによって、これほど大規模なイベント<sup>5</sup>の実現に至った<sup>6</sup>。また、今年が日仏友好160年に当たること、さらには京都・パリ友情盟約締結60周年を迎えることも後押しして、日本の国

- 1 日本弁護士連合会の知的財産法分野を所管する特別委員会。全国各地から選出された知的財産法分野を手掛ける約85名の委員・幹事によって構成される。筆者は、本年6月まで同センターの担当事務局であった。
- 2 日弁連知的財産センターの活動から派生して設置された。国内外に所在する弁護士等約1000名が加入する任意団体。
- 3 日本の文化・文物や日本的なもの（その総称として「ジャパンコンテンツ」と称している。）は、我が国のアイデンティティーを形成する要素の1つであるとともに、有形・無形の財産であり、グローバル化した社会における平和的・戦略的資源でもあるという観点から、ジャパンコンテンツを世界発信するためにその担い手の方々を在野法曹の立場からサポートするという目的で設置された専門チーム。サポートの前提として、我々自身がジャパンコンテンツを的確に理解しているかも問われることから、同チームメンバーの弁護士の意を受けて本イベントの様子をレポートすることとなった次第である。
- 4 なお、本報告の内容は、筆者個人の見解に基づくものであり、日本弁護士連合会の見解ではない。
- 5 読売新聞（2018年9月17日朝刊・社説）によれば、「日本政府が40億円を投じた過去最大規模の海外文化事業」であるという。

宝や重要文化財を含む傑作の数々が展示される運びとなった。また、オリンピック・パラリンピック開催都市である東京都とパリ市による文化タンドム事業も、特別企画としてジャポニスム2018に参加している。

企画に当たっては、国際交流基金の中に設置された事務局を中心に、両国の政府及び文化機関、民間企業の協働により、開催準備が進められてきた。

## (2) コンセプト

「ジャポニスム」と聞くと、19世紀にヨーロッパで始まった「日本趣味」の流行—万国博覧会への出品等をきっかけとして日本美術が注目されはじめ、フィンセント・ファン・ゴッホやクロード・モネ等のフランスに集った芸術家たちに多大な影響を与えた一大潮流—を思い浮かべる方も多いだろう。

それから数世紀を経て開催されるジャポニスム2018は、現代日本が創造するジャポニスムでもって「世界はふたたび、日本文化に驚く。」<sup>7</sup>ことにより、新たな文化の創造や幅広い国民交流に向けた刺激となることが企図されている。副題の“響きあう魂”には、異なる価値観の調和を尊ぶ日本ならではの「美意識」を世界に紹介し、文化芸術を通して、日本という国への共鳴を世界に広げるといった思いが込められているという。

古今東西を問わず選りすぐりの美術作品がパリ市内に集結することに加え、秋以降には展覧会だけではなく、歌舞伎・能楽・狂言・文楽等の伝統芸能や現代劇といった舞台公演、映像作品上映も行われるほか、今や日本文化の代名詞の1つでもある日本食を楽しむセミナー等の開催も予定されている。会期を通じて50以上の公式企画が実施されるので、本レポート末尾の公式パンフレット掲載の日程表（2018年7月時点）を参照されたい。

このように個別の作家やジャンルの展示ではなく、日本文化を多様な角度から紹介するプログラムとなったのには、「日本の美意識」そのものを提示し、それが世界に浸透していくことによって、日本のソフト・パワーを高めることにある<sup>8</sup>。

## 2 「ジャポニスム 2018」の代表的なイベント

ジャポニスム2018では、50以上の公式企画で日本文化の多彩な魅力を取り上げる。その中の代表的なイベントを紹介したい。

### (1) 展覧会

#### ① 「若冲—<動植綵絵>を中心に」展（2018年9月15日～10月14日）

パリ市立プティ・パレ美術館で1か月にわたって開催が予定される。

---

6 合意に先立って「日本博の開催」を提案した「日本の美」総合プロジェクト懇談会の座長を務め、ジャポニスム2018の公式企画の1つである「深みへ—日本の美意識を求めて—」展のコンセプトを提唱した津川雅彦氏は、その開催を見届けるように8月にこの世を去った。

7 ジャポニスム2018のウェブサイトやパンフレットに掲げられているキャッチフレーズ。

8 日仏両国間には先例があり、フランス国内における日本文化の発信拠点であるパリ日本文化会館は、1997年に日仏の官民協同により設立された。その目的の1つには、創設が決定した1982年当時には両国間には深刻な貿易摩擦が生じていたが、日本は経済だけではなく豊かな文化を有する国であるということを伝えるためでもあったという。[http://www.designstoriesinc.com/special/interview\\_japonismes2018/](http://www.designstoriesinc.com/special/interview_japonismes2018/)

伊藤若冲の最高傑作とも称される「動植綵絵」のヨーロッパ初公開<sup>9</sup>が予定される。「動植綵絵」は「釈迦三尊像」（京都・相国寺所蔵）を飾るために描かれたものだが、今回は双方ともにパリに渡り本来の一体の姿で紹介されるという貴重な機会となる。

伊藤若冲は、細密でリアルな描写、強烈な色彩、大胆な構図で、日本では2000年代に入ってから再評価され、一大ブームを経た今も熱狂的な人気を誇る。日本国内だけでなく、2012年の米国ワシントン・ナショナル・ギャラリーで行われた国外で初めての展覧会「Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Itō Jakuchū」でも、連日大盛況で入場制限が行われる程であったという。江戸のアバンギャルド、伊藤若冲がパリの地で新たなジャポニスム旋風を巻き起こすか、期待が高まる。



伊藤若冲〈群鶏図〉（動植綵絵30幅のうち）  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵



伊藤若冲〈老松白鳳図〉（動植綵絵30幅のうち）  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

② 「京都の宝—琳派300年の創造」展（2018年10月26日～2019年1月27日）

パリ市立テルヌスキ美術館（Musée Cernuschi）で3か月間にわたって開催され、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」を含む国宝や重要文化財の傑作が公開される。

琳派は、デフォルメや繰り返す意匠の効果等、現代グラフィックにも通じる高いデザイン性で今も強い影響力を誇っている。

琳派芸術もまた、19世紀後半にパリやウィーンで開催された万国博覧会への出品等を通じて、ジャポニスムの流行に一役買ったことで有名である。クロード・モネといった印象派の画家、ウィーン分離派で金箔を使用した装飾的かつ平面的な技法で描かれた作品「接吻」で有名なグスタ

9 海外での展示自体が、2012年の米国ワシントン・ナショナル・ギャラリー以来2回目。

フ・クリムト、アール・ヌーヴォーを代表する工芸家のエミール・ガレにも愛好され、西洋絵画等の新しい潮流に大きな影響を与えたとされる。

それにも関わらず、現在までの長い間、なぜかフランスの人々の記憶からは忘れ去られていた。ジャポニスム2018をきっかけとして、19世紀当時最先端の「現代アート」であった琳派芸術が再発見されるのか、非常に注目である。



国宝 〈風神雷神図屏風〉 俵屋宗達筆 京都・建仁寺蔵 江戸時代

## (2) 舞台

演劇では歌舞伎・能楽・狂言・文楽といった伝統芸能から、日本を代表する演出家たちが手掛ける現代演劇やセーラームーンのミュージカルまで幅広く、ダンスも日本舞踊もあればコンテンポラリーダンスもあり、さらには能楽×3D映像、雅楽×コンテンポラリーダンスのコラボレーション等が、秋以降に順次公演される。

日本の美意識の表徴としてすでに高い評価を得ている伝統芸能には、目の肥えたパリ市民の期待値も高いだろうと予想される。その中でも歌舞伎は、1928年に当時のソビエト連邦で最初の海外公演が行われてから90年という歴史を有する。近年では、海外でも人気を誇る漫画「ONE PIECE」や「NARUTO—ナルト—」とコラボレーションした新作歌舞伎への挑戦もなされているが、松竹大歌舞伎の演目としては「色彩間菟豆かさね」と「鳴神」という古典中の古典が上演された（2018年9月13日～19日）。出演の中村獅童さんと中村七之助さんが語った<sup>10</sup>ように「伝統を守りつつ革新を追求していく」歌舞伎。培われてきた独特の演技や様式美が、2007年以降の公演となったパリを新たな驚きとともに魅了したことだろう。

## (3) その他

パリを象徴する建築物の1つであるエッフェル塔。世界的な照明デザイナー石井幹子さんとリーサ明理さんの企画・プロデュースのもと、特別ライトアップが行われた（2018年9月13日～14日）。エッフェル塔に太陽が昇り、尾形光琳の燕子花が咲き乱れる趣向になるそうだ。テレビ報道で見る限り、多くのパリ市民や観光客の目を釘付けにした様子であった。

10 歌舞伎公式総合サイト「歌舞伎美人」<http://www.kabuki-bitto.jp/news/4692>に両氏のインタビューが掲載されている。



〔ヨーロッパ文化とは異なる、日本特有の色合いをまとったエッフェル塔。〕

この他にも、参加型プログラムの多い「日本の食と文化」シリーズでは、シェフから子どもまで様々な層を対象としたセミナーやワークショップ、パリ市内の名だたるレストランの協力を得て日本の食・茶・お酒を楽しむツアー等が開催予定である。

### 3 実際に訪問したイベント

筆者が訪仏した期間（2018年8月9日～12日）は、残念ながら舞台公演や映像作品の上映等はないため、実際に足を運ぶことができた3つの展覧会とパリ市内の様子をお伝えしたい。

(1)と(2)の展覧会は、安倍総理大臣に代わって開会式に参加した河野外務大臣が、7月12日・13日に訪問した目玉企画の1つでもある。

#### (1) 「深みへー日本の美意識を求めてー」展

ジャポニスム2018のオープニングを飾る企画で、凱旋門から徒歩10分程度と至近にあるロスチャイルド館（Hôtel Salomon de Rothschild）で、2018年7月14日から8月21日の期間に開催された。

縄文時代から現代までの日本の歴史を俯瞰し、絵画・彫刻・写真・インスタレーション・ファッション等の多様な手法を用い、「日本の美意識」を表現する展覧会。私たち日本人が「日本の美意識」として真っ先に思い浮かべるであろう、葛飾北斎の富嶽三十六景をはじめとする浮世絵や、禅の教義・精神をユーモア溢れる筆致で描いた“かわいい”禅画の二大巨匠である仙厓義梵と白隠慧鶴の展示ばかりでなく、プリミティブなパワーを宿す国宝・火焰形土器、1枚の写真に一瞬と永遠が共存する杉本博司の海景シリーズ、彫刻家・名和晃平の泡と光のインスタレーション作品等、多彩な作品が並んだ。

単に国宝・重要文化財級の展示品が揃うだけでなく、意表を突く作品の組み合わせ、コラボレーションが楽しめる点も印象的であった。同展覧会のキュレーターを務めた長谷川祐子氏（東京

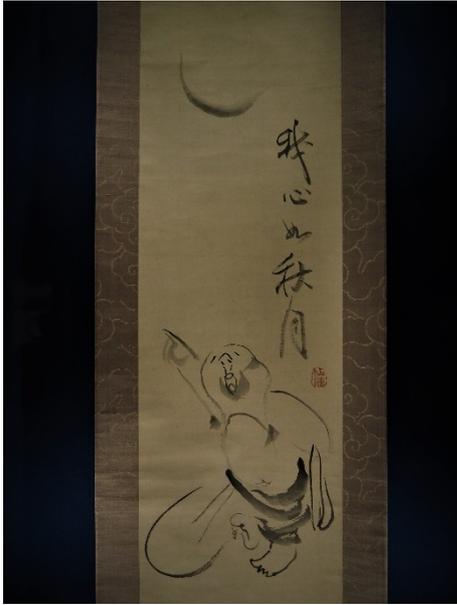
都現代美術館参事・東京藝術大学大学院教授)のコメント<sup>11</sup>によれば、「馴染みの作品には得てしてステレオタイプなイメージがありますが、ここでは作品の組み合わせにより、そのカタチが変容します。作品の背景にある物語や文脈を個々の感性で感じ取り、そしてすべては繋がっていることに気付く邂逅の瞬間の連続」だという。そのような意図があっただけでなく、フツウの展覧会であれば作品の横にあるはずの作品名や解説の類いがなく、その機能は展覧会のパンフレットに集約されていたことも特徴の1つであった。恥ずかしながら筆者はすぐに「答え合わせ」ができないもどかしさを初めは感じたが、周囲の皆さんは展示作品を楽しまれていて、先入観なしに新たな日本文化の魅力に見入っている様子であった。

展覧会の鑑賞を終えたパリ在住のマダム（今年4月に訪日したそう。現代のジャポニザン？）にお話を伺ったところ、パリ市内でも日本の美術作品を一挙に見る機会はずいぶん多いので非常に有意義だと喜ばれていて、展覧会のコンセプトに対しても「昔の作品と現代の作品、対極的な価値観を示す作品がミックスされていて、とてもエキサイティングだった」と興奮気味に感想を話してくださったのは日本人としてとても嬉しかった。



〔左：会場のロスチャイルド館。右：フランス国内外からの観光客で溢れていた。〕

11 CREA Traveller <http://crea.bunshun.jp/articles/-/20055>の特集記事から抜粋。



〔左：仙厓義梵の禅画「指月布袋図」、右：大巻伸嗣「Echoes Infinity」とガイドの解説に聞き入る人々。この他にも、撮影NGだったが、国外初公開となる田中一村の絵画とポール・ゴーギャンの木版画等、多彩なラインナップが並んだ。〕

## (2) 「TeamLab : Au - delà des limites (境界のない世界)」展

ジャポニスム2018の開会式が行われたラ・ヴィレット<sup>12</sup> (La Villette) にて開催された大規模なデジタル・アートの展覧会である。

手掛けたのは国内外で大きな注目を集める「teamLab」。パリと同様の「境界のない世界」をコンセプトとした東京・お台場の展示には、オープン時には連日にわたって長蛇の列ができたという。パリでも大人気で、(筆者が訪れたのが土曜日だったこともあるかも知れないが) チケット購入までに約30分、入場までに約20分並ぶこととなった。

このインスタレーションは、複雑なプログラムを処理する最新のテクノロジーを使って描かれたデジタル・アート作品で、事前に記録された映像を再生するのではなく人々の動きによって作品が変容し続けるようにプログラミングされている。

絶えず変化する美しい映像世界に入り込んでしまったような没入感を味わえるためか、座り込んでボーッと映像を眺める人も多くいた。境界のない世界—自分と他者、人々と世界との境界を曖昧にし、新しい関係を模索していくことが狙いにあるのだそう。

---

12 パリ市内最大の公園で、展示施設の他にもコンサートホールを有する。元祖ジャポニスムが花開いた当時の「現代アート」を牽引する存在だった印象派をはじめとする画家たちに深い縁のあるモンマルトルがある18区に隣接する19区にある。



〔会場ではフランス有力紙のLe Mondeや雑誌Madame Figaro等の掲載記事を張り出して紹介していた。新聞の扱いの大きさに地元フランスでの反響の大きさが感じられる。〕



〔まるで鳥獣人物戯画から抜け出したような躍動感溢れるうさぎも、壁面を流れ落ちる滝と咲き誇る花々も、全てデジタル・アートで描かれている。〕

### (3) ルーヴル美術館ピラミッド内特別展示 名和晃平彫刻作品“Throne”

ルーヴル美術館といえば？ 珠玉の所蔵作品とともに、中庭のナポレオン広場に設置されたガラス張りのピラミッドを思い起こす方も多いことだろう。そのピラミッド内部に、目に鮮やかな金箔の巨大彫刻が鎮座している。「Throne（玉座）」と名付けられたこの作品は、ピラミッドを権力や権威の象徴として捉え、巨大彫刻それ自体は「空位の玉座」を表している。

館内では「あの金色の物体は何？」と囁く日本語も聞こえてきた。多くの来館者がこの彫刻を撮影する姿も見られた。世界中から毎年1000万人が訪れるとも言われるルーヴル美術館で、この作品をきっかけにしてジャポニスム2018の開催を知り、関心を持つ人々がきっと多数いることだろう。



〔自然光の下も美しいが、ライトアップされて闇夜に浮かび上がる姿も必見。〕

#### (4) 街角のポスター

パリ市内の散策中、ジャポニスム2018そのものや展覧会「深みへー日本の美意識を求めてー」展のポスターが、美しい街並みを背景にして貼り出されているのを何度も目にすることができた。パリのシンボリック存在の1つであるオペラ座（ガルニエ宮）に向かう目抜き通りやセーヌ川沿いの遊歩道など、主要な観光スポットでも大きく掲示されていた。



〔左：古くから日本の文様等に描かれてきた富士山、太陽、波を模したロゴマークとエッフェル塔が共演するポスター。ライムストーン（白い石灰石）の建物に映える。ロゴマークはフランス国旗のトリコロールを意識？ 右：オペラ通り沿い。奥に小さく見えるのがオペラ座。〕

## 4 総括（雑感）

19世紀にフランスに集った芸術家たちによって、包み紙同然に扱われていた浮世絵に美が見出されたように、今回のジャポニスム2018の開催によって私たち日本人も気づけなかったような日本文化の新たな魅力が発見されるのではないかと期待している。訪問前までは19世紀のジャポニスムが引き合いに出された紹介記事を見るにつけ、当時のような「遙か遠くにある未知の国」で

はなくなった日本の文化芸術が新鮮な驚きをもって迎え入れられるのか、少なからず疑問も感じていた。しかし、「深みへー日本の美意識を求めてー」展で出会ったマダムのお話を聞いて、日本文化の歴史と多様性に思いを馳せ、ネオ・ジャポニスム旋風が巻き起こることを願うようになった。



[左：パリ郊外ジヴェルニーにある印象派絵画の巨匠クロード・モネの家。名作「睡蓮」のモデルとなった日本風庭園がある。右：アトリエ・住居としてモネが過ごした家の中には浮世絵コレクションが所狭しと飾られている。モネが浮世絵、ジャポニスムを深く愛していたことが窺い知れる。]

今回初めてパリを訪れて感じたのは、自身の魅せ方をよく理解している、自己演出力の高い街なのだろうということである。2度目の東京オリンピック・パラリンピックを2年後に迎える今、開会式・閉会式はどうなるのだろうかと身近で話題にのぼることも増えてきている。日本人自身が誇りに思う日本の魅力と、外国人から見て「こうあって欲しい」と望まれる日本の姿とがともに響き合ったら、さぞや素晴らしいプログラムになるだろうと感じる。今後も、「ジャポニスム2019」及び「日本博2020」（いずれも仮称）の開催に向けた企画検討が進んでおり<sup>12</sup>、フランス以外の国々とも文化芸術を通じた一層の交流が図られていくことだろう。

国宝や重要文化財を含む珠玉の作品が一堂に会し、また、日本が誇る伝統芸能や現代演劇、映像作品までもをまとめて経験できる機会は、日本にいても滅多にはない。パリという街がさながら日本文化の博覧会場になるというビッグイベントの会期中に訪仏し、また、日頃は表舞台に出ることのない日弁連事務局がこのようなレポートを掲載する機会をいただいたことを、大変光栄に思う。

最後になったが、本報告を執筆するに当たって問合せを差し上げた、国際交流基金ジャポニスム事務局、内閣府知的財産戦略推進事務局の皆様（個人名は控える。）、快くご対応いただき、ありがとうございました。

以上

12 ジャポニスム2018の開催準備等に関する関係府省連絡会議（第3回・2018年6月26日開催）の議事要旨には、安倍総理大臣から両実施事業の準備を進めるよう指示があったとの言及がある。

